

将棋の話だが、4月1日、佐藤天彦^{あま}名人がコンピュータソフト・PONANZAに負けた。佐藤天彦といえば、将棋を知らないひとでもその名前を知っている羽生善治を破って名人になった、いまが旬の棋士だ。敗戦の弁は「ソフトは読みの精度が高く、正確だった」というものだったが、それがどうした、とおもってしまった。

将棋のコンピュータソフトが売り出されたのは80年代後半頃だったとおもう。どんなものかと興味半分に買って使ってみた。たしか森田将棋とかいう名称だったとおもうが。初期のソフトはオモチャみたいなもので下手なほうでも簡単に勝てた。とはいってもコンピュータである。徐々に改良されたものが販売され強くなっていたが、こちらが通常の手でない手を指すとその意味がわからずとんちんかんな手を指してしまう、といった程度の改良版でしかなかった。おもしろくない、というよりも、パソコンにむかって将棋を指すのがばかしくなると、ソフトを買うのをやめた。その後、ソフトは進化を遂げ、プロ棋士の対戦でもやすやすと勝利を収めるようになった。が、それがどうした、とおもっている。

将棋をたんなるゲームとみるのか、ひとの営みとしてみるのか、ということだとおもうが、ぼくは後者のほうだ。

コンピュータ世代というのだろう、若い棋士たちは将棋をゲーム感覚で捉えて、コンピュータソフトを研究して好成績を残している棋士もいたりして、いまやコンピュータソフトとの関係を切るなどできなくなっている。

今日は4月の2日で、NHKの将棋トーナメントを見ながら

いわれたほど、終盤の読みは正確だったそうだが、コンピュータソフトはそれにましても終盤の読みは正確だろう。しかしそれは、村山のように、棋士との屈辱と優越の交叉した対局を積み重ねた結果うまれたオリジナルな構想の下での読みではなく、入力されたデータを蓄積して数値化した最良値を選び出すことではない。それを「読み」といえるかどうかだが。まあ、プロ棋士が「読み」といつてるから「読み」なんだろうけど、ストンと腹の底に収まらない。

コンピュータソフトをめぐっては昨年嫌な事件があった。ベテラン棋士三浦九段が対局中不審な休憩を取っている。控え室でスマホを使ってソフトを検索して対局の参考に使っているのではないかとということだった。三浦九段の過去の対局をコンピュータソフトと比較してみると一致している指し手がおおい、と指摘されたらしいが、棋士でもコンピュータでも、その局面の最善手を探し出したら一致する可能性は多分にあるはずだ。それに、いちばん疑問なのは、どうしてコンピュータが基本で、棋士がコンピュータと比較されるのだろう。棋士の指し手にコンピュータが一致していた、となぜいえないのだろう。

その結果、彼は協会から対局を休場するよう命じられ、優勝賞金4320万円のかかった竜王戦の挑戦者でありながら対局ができなかった。もし破れても敗者賞金1590万円はもらえた対局を休場させられた。プロは賞金で飯を食っているというのに。

提出されたスマホにはソフトをインストールした形跡がなかったと判断され、今年復帰したし、休場を求めた協会の会長

これを書いているのだが、若手の四段棋士がベテランの九段棋士をあつというまに投了に追い込んだ。めずらしく放送時間が20分も余ってしまった。1時間半の放送なのに。解説をしていた四段棋士の師匠も感心していた。その四段棋士がコンピュータソフトで研究しているかどうかは知らないし、むかしから、勢いのある若手にベテランが破れる構図は多々あるのだが、彼もまたコンピュータソフトでの研鑽を重ねているのだろうか。

賞金のかかったソフトと棋士の対戦も増えている。協会としては「コンピュータ対人間」という話題づくりとともに収入増もあって、経営が苦しくなっている協会にはいい傾向かもしれないが、このままいくと、将棋は「精度が高く、正確さ」を第一義とする一コンピュータゲームであることが優先されてしまいうような気がする。かつて佐藤康光九段は「一秒間に1億と3手読む」といわれた。当然、読みの深さと速さの比喩だが、スーパーコンピュータを使えば「一秒間に1億と3手読む」は簡単に実現されそう。

そのむかし、坂田三吉は関根名人との対局で破れたとき、「銀が泣いている」と言ったという逸話が残っている。自分の銀がそばにいて無駄な駒になっていたということだが、そういう、無駄さ、失着、後悔、そんなものをひっくりかかして、そういう感情すべてをひっくりかかして、それが将棋だろうとおもっている。ぼくはもう古い人間なのだろう。

いま映画や漫画のモデルになっている村山聖^{さとし}、生まれたときからネフローゼ症候群という病根を背負い、最終的には膀胱癌で29歳で死んでしまった村山聖八段は「終盤は村山に聞け」と

と何人かの理事が辞めて、新会長が選出されたのだが、後味の悪い事件だった。(三浦九段を告発したのが、挑戦を受ける現竜王だったことも後味の悪さのひとつだった)

もつともそれはコンピュータソフトのせいではなく、三浦九段に疑いの声をあげた一棋士に責任を負わせるのでもなく、コンピュータソフトの影におのいた将棋協会の醜態だったとぼくはおもっている。それほどコンピュータソフトに棋士は勝てないという幻影が、現実として将棋界をおおっているのかもしれない。

しかし、それがどうした、とおもう。棋士同士が対局する将棋と、コンピュータにつながれたロボットアームが指す将棋とは別物だとおもえばいい。正確無比な差し手で埋め尽くされた棋譜のどこが楽しいだろう。悪手や無駄な手が意味を持つ棋譜のほうがぼくは楽しいとおもう。

さきほどNHKの将棋トーナメントで若手棋士に惨敗した丸山九段はたしか、コンピュータに支配される将棋などやりたくない、というような発言をしていた。

コンピュータ対人間の構図はおもしろい、とスポンサーやマスコミ、観客は飛びついたのだが、そろそろ沈静化してもいいようにおもう。人間の脳には容量の限度があるが(どれだけかはわからないが、きつと有限だろう)、コンピュータは無制限に近い容量を獲得できる。その計算スピードも想像すらできない速さ、光速を超えてしまうかもしれない(アインシュタインに叱られそうだが)。いまのところは棋士もときどき勝っているが、何年後にはまったく勝てなくなっているだろう。そんな

なコンピュータと人間が対戦して勝った負けたということ自体、「だからどうした」という世界でしかない。これからもコンピュータ対人間の対戦が企てられたとしても、それは番外編として楽しめばいいのかもしれないが、棋士はコンピュータと対戦したいとおもっているのだろうか。棋士は勝負師だからたとえ相手がコンピュータでも「勝ちたい」とおもってはいるだろうが、それはゲームに勝つただけの喜びしかないのではないかとおもってみたりするが、ほんとうのところはどうだろう。コンピュータと対戦しない棋士はたくさんいる。負けるのが怖くて対戦しないのだろうか。それとも別な思惑があるのだろうか。どうおもっているのだろうか。

とはいいながら、コンピュータ、人工頭脳というか人工知能には興味を持っている。近い将来、人工知能は人間の手を離れて、どこまで自らを切り開いていくことができるのだろうか。人間と共存などというおとぎ話が実現するだろうか。それとも人工知能は発狂し、暴走するだろうか。それとも、冷やかに人間世界を見ている存在になるのだろうか。

SF小説などでは人工知能に支配された世界が出てきて、そこにはアナクロ人間が残されていて、人工知能とアナクロ人間の戦い、というような構図があるのだが、これから50年後、100年後、世界はどうなっているだろう。見てみたいのだが、たぶん、そんなには長生きはできないだろう。でも、ああ、見てみたい。

この世界（＝この宇宙）は量子力学的に言えば、何億個のな

かの、何兆個のなかの、何京個のなかのひとつでしかない。人間を観測者として存在させているのがこの宇宙であるのなら、人工知能を観測者として存在している宇宙もあるのではないかなどとふとおもってしまうのだが、ほかの宇宙とは接触できないからそれを検証することができないが、ほかの宇宙では、小説よりも奇なり、という世界が展開されているだろう。それはどんな世界なんだろう。人間原理（宇宙がどのように誕生し、どのような物理法則で成り立っているのかという問いかけに対し、人間の存在に理由を求める考え方）でない宇宙とはどんなものだろう。ああ、見てみたい。